＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：「宗教改革から近代キリスト教思想へ」

Ｂ．目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義Ａ・Ｂ」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

Ｃ．到達目標

・キリスト教学をテーマとした研究（卒論・修論）を行うために必要な方法や知識を身につけることができる。
・キリスト教研究に関する広い知見をもとに、自主的な研究に取り組む能力を養う。
・キリスト教学をテーマとした研究を発表するための訓練を受けることができる。

Ｄ．確認事項

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（火３・水５）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

初回のオリエンテーションに続いて、次のような項目について、講義が進められる。一回の講義で一つの項目が取り上げられる。

０．オリエンテーション	4/11
１．宗教改革と近代	4/18
２．古プロテスタンティズムから啓蒙的キリスト教合理思想へ	4/25
３．ヨーロッパ世界の拡大とキリスト教１	5/2
４．17 世紀イギリスとキリスト教思想	5/9
５．自然主義とキリスト教	5/16
６．歴史主義とキリスト教	5/23
７．ドイツ古典哲学・神学の宗教論	5/30
８．シュライアマハーと 19 世紀キリスト教思想	6/6
９．宗教批判の諸問題	6/13
10. 社会矛盾とキリスト教――マルクスの意義	6/27
11. 個人主義か実存か――キルケゴール	7/4
12. ヨーロッパ世界の拡大とキリスト教２	7/11
13. トレルチとヨーロッパ主義	7/18
（14. 自由主義神学の限界と可能性）	
15. フィードバック	

＜導入＞

Ａ．「キリスト教思想史研究」に向けて（「キリスト教学講義」より）

１．宗教現象を見る二つの視点

1)外から、客観的データの分析に基づいて　→　現代宗教学

宗教現象にアプローチするにはまず第一に考えられるべき方法論的態度ではあるが、対象を「深く」理解するには限界がある。

2)内から、内から発信され表現されたものを手掛かりに内面へと迫る

個人であろうと集団であろうと、その内面にまで迫る仕方で理解するには、対象自身が意識的あるいは無意識的に外部へ発信してくる自己表現に注目。

２．思想とは何か？　なぜ思想なのか！

生き方を決めているポリシーの問題（思考方法、発想法、見方）としての思想。

思想は暗記科目ではない。

３．思想は、個人の発明である前に共同体の共有の思考方法である。

→　キリスト教思想は聖書から始まる。

４．思想の歴史性　→　思想史的アプローチの必要性

（芦名定道『近代日本とキリスト教思想の可能性――二つの地平の交わるところから』三恵社、2016年。）

B．近代：哲学とキリスト教思想

哲学的思惟と聖書翻訳の問題

一　問題

二　近代哲学と翻訳――シュライアマハーの場合

三　ベンヤミンとリクールの翻訳論

四　聖書翻訳と適応の原理